



2026 年 3 月 1 日 発行
(通巻 508 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 105

- ・「出航」再演します (1)
- ・「出航」公演 「出航によせて」木村快 (2)
- ・「遠い空の下の故郷～ハンセン病療養所に生きて」 (3)
- ・木村快の雑談会 90 歳祝い・岡田京子さんと歌う会 (4~5)
- ・「緑町ふれあいサロン」・第 2 町会「防犯講習会」 (6)
- ・追悼 黒澤義之さん 木村快 (7)
- ・お知らせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987



山田 清崇



伊藤 嘉朗



杉山 龍



木の下 敬志



八木 浩司



永野 和宏



廣瀬 正仁



山中 宏明



町田 大征



江川 泰子



木下 美智子



環 幸乃



那由多 凜



長谷川 葉月



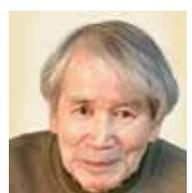
矢川 千尋



野田 詩



熊倉 正博



渡辺 啓明



今村 純二

「出航」再演します

魚の捕れなくなった、いわば展望のない海へ船出していく遠洋漁船があった。それがなぜか悲壮ではなく、ウキウキした陽気な気分を漂わせているのだ。あれは 1980 年代のことだが、豊かさにあふれた社会は次第に姿を消し、国際的な漁業規制などで漁業の未来も厳しくなってきた。海に見切りをつけた漁船員たちは、陸の仕事求めて歩き回った。しかし、日銭を稼ぐ仕事でもさまざまな屈辱を味わったし、愚痴をこぼせばすぐ追い出された。働く力はあるのになげだ。そっ、仲間がいない。

♪「北の海へ行ってまた働くよ。どうせ果てるなら海で果てるよ」

船の生活は厳しかったけれど、嵐に襲われた時も力を合わせて戦ったし、帰港を待ちわびる街の人々とも仲間同士だった。彼らは腹を決めた。

作 .. 木村 快
音楽 .. 岡田京子
演出 .. 八木澤賢

5 月 1 日(金) 2 日(土) 3 日(日・祝) 4 日(月・祝) 5 日(火・祝) 6 日(水・祝)

開演:午後 2 時 会場:現代座ホール 参加費:一般4000円 学生3000円 要予約

TEL:042-381-5165 FAX:042-381-6987

MAIL:gendaiza.ticket@gmail.com

予約専用 <https://gendaiza.corich.co/shukko/yoyaku>

CoRichチケット!のページが

開きます

* 会員登録は不要です



「出航」公演

5月1日から6日まで「出航」を再演することになりました。昨年の2月公演の時、思いもかけず満席になり、予約できない方がたくさんいらっしゃいました。また公演の評判もとても良く「号泣しました!」とか「もう一度見たい」という声を寄せていただきました。

「出航」は1980年代に創られた芝居です。今とは社会の状況も人間の関係もかなり違っています。それでも、船の中で命がけの仕事をしているにやってきた仲間のつながりや、港で漁師たちを迎える人々の互いを思い合う姿は、本当は今の時代にも変わらない「人間」そのものではないかと思えます。出演者もスタッフもとても充実感を持ちました。「これはまさに今の時代の芝居だ」と感じました。「再演したい」と思いました。

しかし出演者のスケジュール調整をしているうちに、照明の渋谷博史さんが海の事故で亡くなり、老船長役の黒澤義之さんが膵臓ガンの治療中に心筋梗塞で亡くなってしまったのです。

どうするか。現代座メンバーで再度話し合いました。そして…、やっぱり出航することを決めました。照明は渋谷さんのプランで妻の木村康恵さんがオペレーターを担当します。新しい出演者も加わってくれました。心も新たに「出航」の世界に挑んでいきたいと思えます。

「出航」によせて

木村快

「出航」を書いてから四〇年以上がたった。あの時は漁業界の問題として見ていたけれど、今思うと、実は人類の直面する将来を暗示していたのだ。

今の時代、それぞれが便利なスマートフォンで自分だけの世界を作り、犯罪を複雑化させ、政治状況を混乱させている。

便利な社会を求めて地球温暖化を進め、その結果、災害が連発すると、もう引き返すことは出来ないのだと叫んでいる。そしてやむことのない国同士の殺し合い……。

人間は自然に適応した生き方を捨て、目先の便利さばかり目を向けてきた。そのため便利な世の中になればなるほど生命力を低下させるというきわめて矛盾に満ちた状況に立たされているのだ。

魚の捕れなくなった海に出かけて行くことは、漁師にとっては辛いことだが、それでも彼らが「自分は海でしか生きられない」と思っていることに、わたしは救いを感じる。そこでしか生きられない人間だけが、自らを強くし、自然との共存の道を見出すだろう。

いったんは海から逃げ出そうとした漁師たちが、結局はよくても悪くても自分の生きる場所であることを知って、ふたたび海にいどむ姿をわたしは見たいと思った。その船出はきつと悲壮なものではなく、共通の運命を自覚することによって、孤立から脱却し、かつてはおびえた海に、生きるための新たな戦いをいどむ新しいロマンが息づいているはずだ。

人間は連帯することによってもっと強くなれる。そして自然と共存する道を見つけ出すだろう。わたしはそう思いたい。わたし自身のために、わたしにつながる仲間や、仲間の子どもたちのために。



1場 漁から戻ってきた「宝亀丸」の安着祝いで全員で手締めをした。しかしこの後……

(2025年舞台より)

「遠い空の下の故郷」 ハンセン病療養所に生きて」

2025年12月22日。港区にある大本山永平寺別院・長谷寺（ちようこくじ）で、修行僧の人権学習会として呼んでいただきました。「遠い空の下の故郷」はハンセン病療養所に暮らす2人の女性の人生を語ります。

企画してくださった宗清志さんとは、福井の曹洞宗大本山永平寺で、「遠い空の下の故郷」の語りをした時に会いました。2008年の事です。そして2011年にはご自分のお寺、福井今庄の棟岳寺での檀家さんの集まり「宵詣り」に呼んでくださいました。

宗さんは今、東京の「大本山永平寺別院・長谷寺」に来ていらつしゃいます。そして修行僧の人権学習として、ハンセン病のことを考えようと、現代座に声をかけてくださったのです。

修行僧は二十名ほど。座禅やお務めだけでは無く、掃除や食事作りや、入浴まで、すべてが修行という生活をされているそうです。修行としての人権学習だと思おうと、つい緊張してしまいます。でも「若者だけでは無く社会生活を経て修行に入った人もいるし、ハンセン病のことを何も知らない人もいるでしょうが、いつも通りに語ってください」と宗さんに言っていたいただいて、安心して語ることが出来ました。



語り 木下美智子



演奏 矢川千尋

寄稿「木下美智子氏」

東京都港区 長谷寺内 宗清志



木下氏の眼は美しく深い。

「うたと語り 遠い空の下の故郷」ハンセン病療養所に生きて」。NPO現代座、木下氏の声を聞くのは、永平寺、わが寺、そして今回。心に沁み込む。

今回、人権学習会としてこの寺の二十数名で傾聴しました。まずは、ひとりの修行僧の感想文を抜粋してご紹介します。

「木下美智子さんの話に引き込まれ、心に響いた。阿部智子さんのお話で涙が流れてしまい、そのあとに歌った「赤とんぼ」は声を出してしまうと溢れてしまうので、声を出して歌うことができず感極まってしまうました。私はハンセン病のことを何も知りませんでした。」

山道で、霧の中を歩いてみると、知らず知らずのうちに、身にまとう衣がしっとりとして湿っているのに気づきます。濡れるともなく、濡れぬともなく、知らず知らずのうちに、いつの間にか着ているものがしめつてずっしりとしていきます。「霧の中を行けば、おぼえず衣しめる。(道元禅師)」。

花をもてあそんでいると、自然に花の香りが着ている衣にうつり落ちてきます。(花を弄すれば、香衣に満つ。)

人生も、またそれと同じかもしれない。どんなことに日ごろ触れているか。いつからそうだったのか

わかりません。急にそうなるのではない、いつしかその人の身と心に沁み込んでしまうのです。美しい心に触れていると、だんだん自分もほんの少しかもしれないけれど、わが衣を潤すことでしょうか。そして……、その霧は外にあるのではない。

己れが身のうちにある。おのれの思い、おのれの心ではありますまいか。

おのれが、何を思いつづけているか。

何を願いつづけるか。

何をよしとしつつづけているか。

何を大切にしつつづけているか。

何を求めつつづけばならぬのか。

それこそが、私たちをしつとりとしめらせつつづける本当の霧ではないのか。

木下氏の気高く清らかな眼がそう私に語りかけ、生きる事実・命の真実を真正面から観よ、観よと突きつけられている感覚に胸がふるえた。

国立ハンセン病療養所に入所させられた、たくさんの方々。その無念、怒り、悲しみ、寂しさ、恐怖、苦痛……父と母、兄、姉、弟、妹……望郷。失っても失っても、人間の崇高さを失わなかった方々よ。あなた方のいのちの真実を受けとめています。

「凡眼をもって観ることなく、凡情をもって念うことなかれ。(道元禅師)」。世間の見識価値観に埋もれてうずくまっていると、それが当然のことと思って生きてしまう。

そうではない。清く潤い澄んだ確かなこころの眼で観、こころの耳で聴け、生きよ。

木村快との劇場文化雑談会

2月11日の「木村快との雑談会」は、木村快が90歳を迎えたことから、90歳を祝う特別の会になりました。

いつもは参加出来ない劇団員も集まって、参加者は18人。お祝いのお赤飯と鯛を薦谷政子さんが用意してくれて、皆さんが持ち寄ったお菓子で食卓は賑やかです。

いつもだと主に快さんが話すのですが、今回はまず、薦谷栄一さんの尺八と政子さんのお琴による、お祝いの演奏からスタートしました。続いて参加者からの快さんへのお祝いの言葉。今まで知らなかったエピソードや思いが語られました。それを受けて快さんが90歳になって考えていることを語り、楽しい集いになりました。



お祝いの心をこめて

「春の夜」の演奏

琴：薦谷政子さん 尺八：薦谷栄一さん

90歳を迎えて 木村快



昭和11年2月6日生まれ。

早生まれなので、学校では昭和10年組だった。

的に働かされていたこともあり、朝鮮人差別の強い地域だったからだろう。当然、みんなの仲間にはなれなかった。

集落の子どもたちからよくいじめられた。何度も殴られるうちに、抵抗しないことが一番いいということが判ってきた。対抗しようとするともっとひどく殴られる。しかし、素直に「殴っていいよ」と言うと、逆に気味悪がって殴らないのだ。生き延びるためには争わないことが大事だと思った。だからどんな問題に直面しても、逃げないで、じっと耐えながら相手を静かに観察する習慣を持っている。

一般の子供と違う自分の特徴をあげると、歯茎と足腰が強い点だろうか。少年時代、甘い菓子類はほとんど食べたことがなく、歯は丈夫だった。

足腰が強いのは、広島市のはずれから、中心部の学校建設予定地までバス通学が出来ず、片道30分以上、一人で歩いて通ったからだろう。

学校に行ってもまだ校舎は無いし、出欠だけとってすぐ解散。あとは広島駅周辺の闇市を歩きまわっていた。

中学を終わると、土方の手伝いや荷物運びの仕事をやった。おかげで短い距離なら50キログラムのセメントの袋を2袋担ぐことが出来た。だから自分の身体は頑丈だと自信を持っていた。

ところが38歳の時、原因不明の高熱が続き、病院をいくつも代わり、メニエール病と診断された。脳の三半規管の障害で、以後、自立歩行が出来ず、日常生活のスタイルが全く変わってしまった。

みんなが集まって、突然「快さんの90歳のお祝いです」と言ってくれても、どう対応していいのか戸惑ってしまう。今までそんな経験はなかったからだ。ぼくは三十代後半からメニエール病で三半規管の障害を抱えているので、何時くたばってもしょうがないと覚悟しながら生きてきた。だから年齢のことなどほとんど意識していなかった。

ぼくは戦争中の海外植民地・朝鮮で生まれ育つたため、終戦による日本への引き揚げは戸籍上の本籍地広島市になっていた。ところが広島市は原爆で完全な廃墟となっていたため、やむを得ず母方の親戚を辿って九州の筑豊を転々としていた。

筑豊では朝鮮から引き揚げて来たというだけで、地域の子どもたちに囲まれ、「朝鮮へ帰れ！」といじめられた。筑豊は炭鉱地帯で、多くの朝鮮人が強制

しかしメニエール病を抱えていることも自分の特徴を作ったようだ。医師から「残念ながら、この病気は今のところ治療法がありません。ゆっくり休んで、釣りでもしてたらどうですか」と言われたため、以後、脳科学、特に自律神経の働きに興味を持つようになり、文献をあさった。

突然のめまいで動けないことや、耳鳴りで大変な時もあるけれど、周りも気を遣ってくれたし、自分でも無理しないようにしてきた。

以前は手が震えて思うように字が書けなかったの、芝居の台本を作るときは口述筆記で書いてもらったし、タイプライターやパソコンを使う方法を研究した。だから劇団の文章や宣材は総て自分で編集してきた。

ところが、なぜか90歳を迎えると、どうやら文字が書けるようになった。これは奇跡だ。

テレビの医療番組で、文字だけを記憶するのではなく、手を使って覚えると、関連した身体行動が反応するようになること云っていた。やってみると少しずつ書けるようになった。今はあらゆる事を手書きでメモしている。効果はばつぐんだ。

物忘れが多くなるのは仕方がないが、90歳になって初めて判ることもある。考えようによっては新しい人生の出発でもある。

岡田京子さんと歌う会



元気にアコーディオンを弾く岡田京子さん

岡田京子さんは劇団創立の時からずっと関わって来ている作曲家です。現代座の芝居には主題歌や劇中音楽がありますが、そのほとんどは木村快作詞、岡田京子作曲です。

岡田さんは木村快の伝えたいことを、本人以上に理解していて、岡田さんの音楽によって舞台の場面の色合いや雰囲気が見えてくるのです。

岡田さんは快さんより年上で93歳です。劇団の音楽を創るだけでは無く、ご主人の安達元彦さんといっしょに、色々な音楽活動をし、全国を回ってききました。しかし、安達さんが亡くなりひとりになってしま

いました。物忘れも多くなりました。でも、まだまだ元気です。

快さんとの雑談会のメンバー2人と「岡田京子さんのアコーディオンで歌う会」をやるかと相談し、1月7日に「岡田京子さんと歌う会」を行いました。岡田さんに会いたいと駆けつけてくれた人や、劇団員も参加して10人の集まりになりました。

岡田さんがアコーディオンで演奏してくれて、みんな「出航」の主題歌「北の海へ」を歌い、自己紹介をしました。重いアコーディオンを弾きこなす岡田さんに、みんなビックリ！

できたら又やりたいと思っています。

岡田さんの演奏で歌いたい方、岡田さんに会いたい方、ご連絡ください。
(木下美智子)



最後にみんなで記念撮影

緑町ふれあいサロン

毎月第三木曜日の午後、現代座の1階ロビーで「緑町ふれあいサロン」が開かれている。スタートしたのは2014年10月だから、もう11年半、コロナ禍の時さえ休むこと無く続いている。



「緑町ふれあいサロン」に集まった地域の方々

最初は町会の役員で民生委員もやっていた古明地さんが「地域の色々な人が気楽に集まっておしゃべり出来るような場所をつくりたい」と言ってきた。現代座も、もっと地域の方たちと関わり合いたいと思っていたところだったから、「是非いっしょにやりましょう！階段を登らないように1階でやれば高齢者だって来やすいでしょう」ということになった。チラシを作り呼びかけて何人も人が集まってくれた。

せっかく現代座でやっているのだからと、現代座の俳優の長谷川葉月さんが物語を朗読した時もあったし、東志野香さんが昔話を讀んだりもした。

でも何より楽しいのは、みんなのおしゃべり。今は古明地さんに代わって町会の役員佐野さんと須沢さんが中心になってすすめている。みんなこの一ヶ月の間にあった色々な出来事を話す。散歩に行った場所のことや、見た映画のことや、近所で始まった工事の騒音のことや、先月聞いたのでその映画を見てきたよ、という人もいるし、元大学の先生だった方は毎月健康に関する資料を印刷してきてくれて、みんなで共有する。そして最後はみんなで歌をうたって「また来月会いましょう」と解散する。しばらく顔を見せない人がいれば心配するし、介護で大変な人にはここが貴重な息抜きになる。

写真の日は風邪でお休みの方が何人かいてちよつと少なかったが、毎月10人以上の方が集まってくれる。誰でも自由に参加出来る場として大切に続けていきたいと思う。

(木下美智子)

緑町第2町会 防犯講習会

現代座の2階会議室では、いつも地元の町会の役員会や総会が開かれています。

2月28日(土)は「防犯講習会」が行われました。話してくださったのは、小金井警察署地域課の茂藤(しげとう) 広次郎さん。「ふれあいポリス」です。

「ふれあいポリス」とは、各警察署の地域課に所属し「犯罪の起きにくい社会の実現」に向け、警察と地域住民を結ぶパイプ役として活動する警察官だそうです。

「とにかく警察に対するハードルを下げたいんです」と言う茂藤さんは、凶悪事件に対峙してきた元刑事で、身体も大きく何だか怖そう。でもその迫力で、実際にあった詐欺の具体的な手口を、まるで落語家のように実演してくれるのです。聞いているみんなは思わず引き込まれ、大笑いです。



困ったことがあったら、何でも地域課の「ふれあいポリス」に相談すればいいんだと、納得した楽しい講習会でした。

追悼 黒澤義之さん 木村 快



1947年
茨城県生まれ
1974年
劇団「東京芸術座」入団
1979年
劇団「青芸」創立に参加

ここ十年以上、ずっと現代座の舞台の中心にいた黒澤義之が亡くなった。実は昨年の秋、臍臓ガンが見つかり、抗がん剤治療を続けていたのだが、1月17日に心筋梗塞で緊急入院。翌18日に亡くなった。78歳だった。

治療しながらも、体調のいい時には現代座の稽古や会議に顔を出して若者たちを指導してくれていた。

◆不思議な男

黒澤という男は実に不思議な男だった。

黒澤と一緒に芝居を創ったのは1981年、もう45年も前の事だ。彼が参加していた劇団青芸の新作を創ってくれないかと頼みに来たことからだった。

彼らは日本新劇界の大劇団・東京芸術座をやめた連中が造ったグループで、稽古する場所が無く困っていたため、統一劇場の第二稽古場を提供し、応援した。どんな理由があって新しい劇団を作ったのかはまったく知らなかったが、とにかく困っているなら出来る協力はしなくてはいけないと思ったのだ。



『武蔵野の歌が聞こえる』
(2014年)

「武蔵野の歌が聞こえる」川崎平右衛門役
武蔵野台地は火山灰のため広大な荒地だった。幕府の依頼で、一名主に過ぎなかった平右衛門はこれを豊かな農地に作り替え、82ヶ村を建設



「出航（2025年）」 黒澤は初代老船長役。

経営が成り立たず、船の廃船が決まる。
初代老船長は立ち上がる。
「海で育った人間が陸でくたばるか」
老船長が歌い出した「沖揚げ音頭」は、みんなの心を振るわせ、やがて大合唱になっていく。

そして作品を書いて欲しいという依頼に応えて書いたのが「ターミナル」という作品で、川崎の工場地帯で働く若者たちの話だった。黒澤と一緒に川崎の工業地域を調査して歩いたときも、彼が目を向ける人物や作業、そして彼のつぶやきを聞いていると、何となく自分もそこで働いているような気分になってくる。

2010年、現代座会館の内部改造を始めたとき、スタッフとして参加していた寺崎昌広が「そうだ黒澤に頼もう」と言い出した。当時、黒澤は演劇の世界から離れ、様々な行事の仮設舞台を造る下請け企業で働いていた。

黒澤は舞台裏の作業についても総合的な知識を持っていたし、「倉い空・友の呼ぶ声」では音響担当として旅公演についてくれた。

稽古中はいつも何となく演出席のそばに立っている

で、こんな風にやるとどうなるかなあ」などと自分勝手につぶやくのだった。

小道具に使う木工細工を造らせても、本格的である。一体この男はどのような生いたちで、どんな教育を受けてきたのだろう。そう思って問いただそうとすると、すぐ顔の前で手を振って、「いやあ、どうってことはないですよ」と、まともに答えようとしな

2014年から始めた合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」では主役の川崎平右衛門を配役し、思うようにやってくれと頼んだ。

2021年の「風は故郷へ」、2022年の「プリンギンホテルにて」、2025年の「出航」と舞台の中心人物の役を担ってくれた。

冥福を祈る。

お知らせ

TEL : 042-381-5165
FAX : 042-381-6987

「出航」公演 ボランティア募集

5月1日(金)～6日(水・祝)に、現代座ホールで行われる「出航」公演を支えるボランティアを募集しています。

- 公演の受付や場内案内等のお手伝い
- 公演終了後の「喫茶コーナー」のお手伝い
- 公演のビデオ撮影
- チラシやポスターの配布
- 舞台の裏方スタッフ

興味のある方はご連絡ください。

木村快著「希望への旅」再販

「希望への旅」は、1936年に植民地だった韓国の大邱で生まれた木村快の、幼年期と戦争体験、父の戦死と引き揚げ、焼け跡の広島での子ども時代、そして「新制作座」への入団から「統一劇場」創立までの人生の記録です。

1980年に出版したこの本は、もう現代座にも在庫が無く、読んで貰いたくてもかなわない状況でした。そこで同時代社に相談して再販することにしました。

新しく1985年までを書き加え、写真も入れます。5月の「出航」公演までには出版の予定です。

どうぞお楽しみに！

現代座会館

2025年12月～26年2月 活動日誌

12月10日 「木村快との雑談会」

20日 「現代座レポート104号」 発送作業

20日 現代座会議

1月21日 「木村快との雑談会」

25日 現代座会議

2月11日 「木村快との雑談会」

21日 現代座会議

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

〔現代座ホール〕

12月4～7日 「サボテンアミーゴ」公演

8～17日 劇団「東少」稽古

26～30日 劇団「獣申」公演

1月6～9日 「影法師」稽古

10～19日 「チーム・キーチエン」稽古

20～25日 劇団「アルファ」稽古

26～2月8日 劇団「おぼんろ」稽古

2月13～17日 「パン・プランニング」稽古

28日 劇団「青うさぎ」稽古

〔三階小ホール〕

12月15・22日 1月26日 2月16日

1月31日 劇団「SHINJIDAI」公演
小金井女声合唱団

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

〔二階サロン〕

1月7日 岡田京子さんと歌う会

10日 現代座新年会

17日 緑町第2町会役員会

2月28日 緑町第2町会「防犯講習会」

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費 (現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円
協賛会員 10,000円 (1口以上)
正会員 10,000円

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座